礼拝　　２０２３年9月２４日（日）
題　『誰に仕えるか』
テキスト：ルカによる福音書１６章１～１３節

皆さま、おはようございます。
聖書の中には、現代を生きているわたしたちにとって理解するのが難しい話もありますが、今日の個所はとても難しい個所の一つだと言われます。
最近の宣教の聖書テキストの個所は日本キリスト教団の教会歴に記された聖書の個所を宣教のテキストとして選んでいますので､難しい個所にもあたります。
食べ物にも柔らかいものもあれば、固いものもあるように、宣教の聖書を好き嫌いでは選ばないという訓練をわたしも、わたしたちも神さまから受けているのかもしれないとも思ったりします。これは人間関係にも当てはまることかもしれません。好き嫌いで人との関係を考えることは慎むようにと。
さて､今日の聖書個所の小見出しには「『不正な管理人』のたとえ」とあります。
このたとえ話は、イエスさまが弟子たちに話されたものですが、実はその場には当時のユダヤ教の指導者であるファリサイ派の人々もいたことが後の個所から分かります。
ご一緒に聖書に聞きましょう。
1:イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。
主人である金持ちと、その人の財産の管理を任されていた管理人の話です。
事が起こったのは、主人から管理を任されていた管理人が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者がいたのです。主人から任されていた大切な財産を無駄使いすることは、もっての他だとは思います。ある聖書学者は、主人は大地主で管理を管理人に任せていたとみています。
　2:そこで、主人（大地主）は彼（つまり管理人のことです）を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』主人は、管理人に会計報告を出すよういう要求しました。主人は、自分に告げ口をした人をどのように思っていたかは分かりません。すでに管理人のおかしい動きを知っていたのかもしれません。
ちなみに、このたとえ話はイエスさまがされた話で主人とは、天と地をお創りインなった神さまのことだと受け止めることができると思います。
　主人の言葉を聞いて管理人が行った行動をわたしたちは、どう理解し、受け止めれば良いでしょうか。

3:管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。」
管理人は、自分が不正をしていたことが主人にばれたことにうろたえているかのようです。これは神さまは、すべてをご存じでお見通しだということでもあります。実はわたしも小学生の頃、母親のおいてあった財布の中から１０円をとったことがあります。今日の聖書個所を読んでいて思い出しました。
管理人は、気が動転し、自らの今後を思い、今後落ちぶれて行くことに心がふさがれて行くかのようで心が不安に支配されたと思われます。
しかし、管理人は聖書にあるように一つのことを思います。普通思いつかないような大胆な発想だと思います。
「4:そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。」 良くこんなことまで思いつくと思います。そして、そのことを行動に移したのです。
5:そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。
6:『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』
ちなみにバトスとは重量に単位で、１バトスは、約４０Ｌと言われています。
管理人は、４０００Ｌの借りのある者に、油百バトスを半分の５０バトスとして証文・契約書を書き換えさせたのです。
7:また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。
『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証
文だ。八十コロスと書き直しなさい。』小麦百コロス、一コロスは、４００Ｌほどです。つまり４万Ｌです。それを八十コロス、３２０００Ｌに書き換えさせたのです。
管理人は、自分が落ちぶれた時のための対策を講じたのです。
しかし、彼の心と行動を主人、つまり神はすべてご存じだということです。
さて、ここからです。
「 8:主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。」というのです。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。主人は神さま、または神の子である主イエスのこと。管理人が主人から借りていた額を減らしたことは、もちろん良くないことです。
しかし、主人から管理を任されていた管理人の行ったことは、貧しい人たちの借金を減らし、助けることにもなったのです。
主人は、それを「良し」とされた。大目に見られた、ということかとわたしは

思います。
「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。」「この世の子ら」とは、この世に生きている人たち、この世の考えで生きている人たちです。「光の子ら」とは、イエス・キリストに心寄せて生きている人たちまた生きようとしている人々、いわゆるキリスト者のことです。
更に主人は語ります。
9:そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。
そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。「不正にまみれた富」とありますが、「富」ということばは、「マモン」という言葉で、イエスさまが語られていたアラム語では、「金銭、富、財産」を表すの意味です。その意味は所説あるのですが、後にマモンという言葉は、を「不正な富」を表すようになって言ったようです。金銭や富は、それ自体悪ではないのですが、時に人と人との関係をゆがめてしまったり、人間を支配する力を持っていることも事実、現実です。
　しかし、人間はこの富で良いこともでき、貧しい人々、苦しみにある人々を助けることもできます。大切なことは、その富の使い方なのだと思わされます。弱い者たち、貧しい者たち、災害にあった人たちへの助けや支援は、キリスト教ではもちろんのことイスラム教では大いに奨励されているようです。
10:ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。
このことばは、格言、戒めの言葉です。小さな富を大切にして、心をこめて正しく用いるようにとの戒めのように思います。
11:だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。
12:また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。
富や他人のものに、忠実であること。軽く扱わないように、大切にするように、との教えとして受け止めます。
そして、「 13:どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」とあります。
富は、良いことのためにも用いることができるのです。しかし、人間は富に支配されやすいことも事実なのです。富、マモンは、富、お金は、悪魔的な働きを生むことがあるし、人間関係を壊すことがあるし、人を救うこともできるということです。

神に仕える心を持つ時、本当の意味で富も正しく用いていくことができるのではないでしょうか。神さまは、憐みの心を持ってわたしたちの生き方を見守っていてくださるのだと思います。主イエスの心、愛なる神さまに応えて生きて行きたいと願います。

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。　共に黙想いたしましょう。